
バカとダンス系男子と召喚獣

fordforest

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとダンス系男子と召喚獣

【Nコード】

N3551Z

【作者名】

fordforest

【あらすじ】

姫路瑞希の弟にして自称ダンス系男子の姫路幸人は、友人である吉井明久と共にダンスで試験召喚戦争を切り抜けていく。これはダンスに青春と試験召喚戦争と恋を賭けた文月学園ダンス物語。今、タイトル変わった人と思っただ人はムーンウォーク推奨。

もし今ここにあなたがいたら… < 1 > (前書き)

二次創作が苦手な人はお戻りください。踊りは心から。

もし今ここにあなたがいたら… < 1 >

世界は音楽で構成されている。

世界は音の重なり。

あゝ、なんて素晴らしき音の世界。

「幸人くーん。早く起きてくださいーい」

そんな音に包まれるささやかな時間を実の姉である姫路瑞希姉さんに邪魔されるとは。しかも呼んでいるということは朝から危険度十割超確定。

「朝飯いらさないから先に行くー！」

そう言いながら俺は窓から外へ出る。無論制服は着用済み。カバンも忘れてはいない。そして、これから向かうはアイツの家。

「また秀吉の悲鳴が聞こえる可能性高いな。優子のことだから」

そんなことを考えながら屋根から屋根へと伝う。うん、朝の風が肌にあたって気持ちいい。

幼い頃、私のそばに一人の男の子がいつも居てくれた。彼は音が好きで現在でも音を聞きながら踊り続けている。本人曰く「自分はダンス系男子だからな」と言っていた。踊っている時の彼はまさに無邪気な子供みたいで、そんな彼が羨ましかった。

「姉上ー。朝ごはんできたぞい」

そんな気分浸っている所を実の弟である木下秀吉に邪魔された。これは許されざる逆行行為と言えよう。

「秀吉、死ぬがよい」

「あ、姉っ… そっちに曲がらないのじゃー！」

朝の清々しい風と秀吉の悲鳴が見事にデュエット。

「おお、朝から壮絶なものだな」

そこへ、彼がやってきた。

「もう、窓から入ってこないでよ幸人」

「わりいわりい。ちよっとしたリーサルウェポンから自由へのエスケープに忙しくてな」

そう言いながら幸人は、私の部屋に入る。きちんと靴を窓の外で脱いでから。

「って乙女の部屋に入らないでよー！」

「いやいや、実の弟にダブルリストロックを駆ける乙女が……って目の前にいたか」

ケラケラと笑いながら私の頭を撫でる。

「ま、そんなわけでおはよう。優子」

「おはよう、幸人」

そんな彼がそばに居てくれるのが嬉しい。彼のそばに居れるのが嬉しい。

もし今ここにあなたがいたら… < 1 > (後書き)

サブタイトルは英訳すれば分かる。DDRをプレイしている人なら分かるはず……たぶん。

という訳で続くかどうか分からないのですが新作です。
続くのか……これ。

もし今ここにあなたがいたら… < 2 > (前書き)

二次創作が苦手な人はお戻りください。踊りは心から。ステップは気持ちから。

もし今ここにあなたがいたら… < 2 >

「そういえば朝飯は用意しているか？」

「ええ」

俺と優子は、そんな他愛もない会話のキャッチボールをしながら木下家のダイニングへ向かう。なお、優子の実の弟である秀吉はダブルストロックによりテンカウトKO。どっとはらい。

相変わらずの幸人と共に朝ごはんを食べて、それから今日の振り分け試験のことを話しながら学校へと向かう。

「で、秀吉は試験までに復活するか？」

「どうでしょうね」

私と瓜二つの弟である秀吉は、私を差し置いて文月学園の大半の男子生徒から告白を受ける。そしてラブレターを私から秀吉に渡して頼む生徒も多い。ふ・ぎ・け・る・な。

「まあ、いつものことだしな。それよりも一年が過ぎるの早い早い。ヒップホップどころかブレイキングダンスも行けそうだ」

訳のわからないことを言いながらも幸人はケラケラと笑っていた。まったく、無邪気なんだから。

「わかっているとおもうけど試験中に踊り出さないでよ」

「分かってるって」

「どうだか」

そうこうしている内に私たちが通っている文月学園の校門が視界に入り込んだ。

「優子。もし二年になって別々になったら、その時はお互いががんばろうぜ」

二年。そう、私たちは二年生へと進級する。そして二年生から、

文月学園独自の試験召喚戦争が始まる。試験召喚戦争、略して試験戦争。文月学園には試験の成績に応じてAからFの六段階にクラスが分けられる。そしてクラスごとに設備が異なりAに行くほど豪華な物だと聞いている。しかし下に行くほどとんでもないことになるみたい。そして設備を入れ替えるチャンスとなるのが試験戦争。

「その時は手加減しないわよ」

「まあな。出来れば優子とは戦いたくないけどな……」

それってどういう意味かしら？

「ま、その時にならないと分からないし今は目の前の試験だな」

「そうね」

私たちは笑いあいながら試験会場となる教室へ向かう。

「姉上は、相変わらず酷いのじゃ」

もし今ここにあなたがいたら…<2>(後書き)

第二話です。

どうしても優子さんは幸せになるべきだと思っわけです)ry
最後の秀吉の台詞は……まあ、各自想像にお任せします。

もし今ここにあなたがいたら…<3> (前書き)

二次創作が苦手な人はお戻りください。踊りは心から。ステップは
気持ちから。振り付けは勢いから。

もし今ここにあなたがいたら… < 3 >

今日の試験で俺は思わずブチギレですよ。もうね、アホかとバカかど。

あの教師にはムカついた。思わずシャイニングウィザードをかましたほどだ！

「で、これになるわけだな」
「反省したか？」

目の前にそびえ立つ巨大な筋肉の壁、正確に言えば文月学園の教師である西村先生、通称鉄人だ。

「だが、反省しない」
「バカか」

ゴツンという書き文字が似合うほどのいい音が俺の頭の上から痛みと共に発せされた。

「痛え」

「いくらなんでも教師に暴行を加えるとは」

「姉と友人をバカにした奴を教師と 생각いたくないね」

「それでも反省しろ」

再びゴツン。痛い。

「もう、なにやってるのよ」

「悪い。あのあと反省文三十枚分で済んだし、それに見下している奴が許せなかったからな」

タハハと笑いながらも、俺は優子と家に帰る途中だった。

「……バカ。無茶しないでよね」

「……悪い。許してくれとは言わない」

優子に胸板をトントンと叩かれながら俺は思う。俺はある意味で

幸せだな。

試験中に私は思わず目を疑いたくなる光景を見た。幸人が試験官の教師にシャイニングウイザードを放った。試験中にね。

「先生、いくらなんでも生徒を見下した上にバカにするのは俺は許せない。あんたこそがクズだ」

さらに顔面に蹴りを入れた所で幸人は西村先生に連行された。確かに一部始終を見ていたからこそ、その気持ちはわかるけど……。本当に……。バカ。

もし今ここにあなたがいたら… < 3 > (後書き)

短くりズムよく。そんな第3話。そして観察処分者化確定DEATH。

そして本作の合言葉は「木下優子は幸せになるべき」です。

いや、他の二次創作作品とかでも幸せになる作品とかあるから自分もなあって。

でもって試験召喚戦争では、タイトルにある通りダンスで戦わせるつもりです。平たく言えばスペースチャンネル5です。アレです。わからない人はXBLAでスペースチャンネル5パート2をレッツプレイ。曲もDDRやDanceManiaから選曲する予定。もしくはDaftpunkかcapsuleか… まあ、このあたりは追々ってことで。

ところでパラパラとかって今でも大丈夫かな？

もし今ここにあなたがいたら… < 4 > (前書き)

二次創作が苦手な人はお戻りください。踊りは心から。ステップは
気持ちから。振り付けは勢いから。思いは純粹に。

もし今ここにあなたがいたら… < 4 >

その日の夜、俺は明久の家にケータイをかける。数回のコール音の後でガチャリと音が受話器から聞こえた。

『だれー？』

「明久、俺だ」

『幸人？』

「そうだが」

『それで、どうしたの？』

「ああ、今日のことだな。姉さんを助けてくれてありがとな」

『うっん、別に感謝されることじゃないよ。ただ心配だったから付き添っただけだから』

「それでもだ。まああのあと担当の教師を殴っちまったから俺もFクラス行き確定だな」

『ええっ！？ 本当なの？』

「ああ、思わずアイツを足払いで倒してから背中の上でタップダンスしたからな」

『それって殴った……って言えるの？』

「ああ、最後に顔面に一発ロッキー並みのパンチを食らわせたから殴ったと言える」

『それは……ある意味でご愁傷様』

「いや、あんな奴を教師と認めたくないからな。それにお前にはたまに助けられてるしな」

『うっん、僕こそ幸人に助けられてるから』

「じゃあ、お互い様だな」

『そうだね』

互いに笑いながら、春休みの計画を立てながら俺は切りだす。

「そういえば今週末のバイトのシフトだがお前はどうか？」

『今週末は平気だよ。それに福地さんがいるからね』

「ああ、あの人が。俺は苦手かな、あのテンションにはついていけない」

「あはは、まああの人元気有り余っているからね。そういえばこの間のバイトの時に教育実習生としてどこかの学校へ行くって言うたよ」

「なぬっ!？ それマジか？」

「うん」

「……これで文月学園とかだったら俺泣くぞ。超絶的に泣くぞ」

「あ、あはは……まあ、シフトの方は大丈夫だから。それに週末は明日川さんがやってくるし」

「明日川さんか。あの人のダーツはすごいからな」

「うん、501で9ダーツアウト出来る人ってなかなかいないから。それにあの人は僕にとってダーツの師匠だからっ!」

「そうだったな。それは俺も当てはまるぞ」

「あはは、そうだったね!」

「ああ、じゃあそろそろ切るわ」

「うん、また学校でね」

「ああ、学校でな」

ピツと音を立てて通話を終える。しばらくしてまた電話が鳴る。

「はい」

「あ、幸人？」

「優子か」

「うん、今から会えないかな」

「今から……まあ大丈夫だな。どこで会う？」

「幸人のバイト先で」

「了解」

「じゃあ、待つてるからね」

「ああ、すぐに行くよ」

再び通話を終えて、俺は玄関へと向かう。つと、その前に
。姉さん! 今から出かけるから夕飯いらないぞ!」

「い、今から!？」

「いつてきまーす!」

とりあえず、姉さんの科学的殺人料理から逃避するチャンスがあっただけでも儲けものだな。

もし今ここにあなたがいたら… < 4 > (後書き)

今回は会話多すぎな件。

そして地の文少な過ぎる件。

さり気なく明久バイトしてる設定も盛り込み。

さらにダーツも盛り込み。

続くかどうかは俺のやる気しだいになってきたこのごろ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3551z/>

バカとダンス系男子と召喚獣

2011年12月24日23時54分発行